〈青森県史〉の窓 194

子どもたちはどこで遊んできたのか？

中園　裕
（県民生活文化課〈県史担当〉総括主幹）

子どもの遊び場といえば、遊園地や児童公園を思い浮かべる人が多いと思う。昨今ならば、ショッピングセンターのキッズコーナーも対象になるかもしれない。しかし、高度経済成長を迎える1950～60年頃と現在では事情が大きく違っていた。

十府ヶ浦海水浴場＝1959（昭和34）年・野坂千之助さん撮影提供

機械化が本格化する前の農作業は多くの人手を要した。親の手を必要とする小さな子どもは、親が田畑に連れて行き、畦などに子どもを置いたまま農作業をした。田んぼや畑の一角は「こびり（こびる）」と呼ばれる休憩や間食の場だった。母親が乳飲み子に授乳することもあった。子どもたちの遊び場が田んぼや畑となるのは自然の成り行きだった。

岩木川や馬淵川など大きな川が多い青森県。川は子どもたちの遊び場だった。川縁で魚や小動物を追いかけ、夏は川に入って泳ぐ。川に近い小学校では河原が校庭代わりになることもあった。五所川原市の岩木川河川公園は河原を整備したものである。

三方を海に囲まれた青森県は漁業が盛んだ。人手を要する漁村では子どもたちも大事な労働力。ホタテの養殖が盛んな野辺地町では、子どもがホタテの貝殻集めを手伝った。貝殻はカキの養殖用の種付けに使われた。イワシ漁の盛んな三沢市や百石町（現おいらせ町）では、子どもたちも海岸で船や網を引く手伝いをした。親の仕事を手伝うのは当然という生活環境があったのである。

親の仕事を手伝いながらも、子どもたちは地域の環境に見合った遊びをした。青森港や八戸港など、港や市場が身近にあった子どもたちは釣りに熱中した。漁師の延縄漁を取り入れた延縄遊びは、子どもの遊びとは思えない高度なもの。小さな頃から大人たちの仕事を横目で見つつ、それを自らの遊びに取り入れていったのだろう。漁師の卵の誕生である。

街場の子どもたちは道路や空き地が遊び場だ。石蹴りやまりつき、ビー玉にメンコなど、小道具は用いるが、基本的に自らの身体を使って遊んだ。男の子は相撲やチャンバラごっこ、女の子はゴム跳び、縄跳び、お手玉など、男女で遊び方に相応の違いがあった。高度経済成長によるインフラ整備で、街場や郊外には建築資材や土管が並んだ。街場の子どもたちは工事現場のような危険な場所でも、仲間どうしで遊び回った。

山村の子どもたちは山や谷が遊び場だった。海岸沿いの子どもたちは砂浜で波と戯れ、岩場で小動物を見つけて歓声を上げた。野辺地町の写真家である野坂千之助さんの写真をご覧いただきたい。十府ヶ浦の海岸で遊ぶ子どもたちは実に楽しそうだ。

当時の十府ヶ浦は砂利の多い海岸だったが、子どもたちは日が暮れるまで遊んだ。満足な遊具のなかった時代の子どもたちは、順番を決め競い合うようにブランコに乗った。その後、海岸は海水浴場として整備が進み、海浜公園として観光地の一つになった。しかし、当時あったブランコはなくなった。

昔日の子どもたちの姿は、言葉や文章で説明するよりも写真を見た方がよくわかる。写真には当時を生きてきた人々の心を惹きつけるものがある。写真の芸術性に注目が集まる昨今だが、時間を瞬時に過去へと誘う写真の記録性に、写真の本質があると思う。

『東京と青森』643号
東京青森県人会　2021年11月号